

来るものを受けること

津守 真

「される」ことに敏感な子ども

向こうから来るものをどう受けるか、受ける仕方は子どもによっていろいろである。ある子どもは、さわられたり、話しかけられたり、何かをされることに対して敏感に感じ、恐れたり拒否したりする。このことは、何年間にもわたる保育の中で、次第に形をかえ、変化し成長してゆく。

三歳のK男は、ぬれたパンツや汚れた衣服を着替えさせようとすると、大声でわめき、力一杯あばれて衣服を脱がされるのをいやがった。はじめのうちは私共も暴れる手足をおさえてぬがそうと試みたこともあったが、身体にふられることに人並み以上に敏感な子

どもであることに気づき、無理をしないようにしてきた。

いまK男は八歳である。先日、朝、私に出会ったK男は、私を水道につれてゆき、たらいに水をいれて私にかけた。私が逃げまわると庭の端まで追いかけてきた。そして私を更衣室につれてゆき、「パンツぬいで」といって私のズボンをはきかえさせた。それで私も、ズボンを着替えさせるために、K男は私に水をかけたのだと納得した。こんなことが何日もつづいている。私が逃げるとタオルに水をつけて追いかけてくることもある。私は小さいときのK男のように、大声を出していやがったりしながら、更衣室にいつて着替える。K男の明るい笑顔とやりとりする朝のひとときは楽しい。

K男は小さいときに大人から受動的にされたことを、いま、大人との間の能動的な遊びにかえている。

K男は身体にふれられることに敏感であるし、また、人から見られることにも敏感である。朝、門から入ってくるるときも、慎重に中を見て、人から見られないように木の繁みに走りこんでから、そろそろと皆の中に入ってくるのが常だった。この頃でも、新しい実習生がいると、先生の後ろにかくれてしまう。

K男は追いかけてごっこが大好きである。つかまえられるように滑り台の階段を走って上り、斜面から滑り下りる。追いかけてくれというように笑いながら大人の顔を見る。ときどきわざとつかまえられるでぶざけ合う。かつては追いかけてごっこつかまえられることが恐怖だったK男は、いまそのことを能動的な遊びに転換している。

身体をつかまえられること、他人が見られることなど、自分が他人から何かをされることに敏感な子どもに対しては、近寄り、視線を向け、話しかけるのにも、控え目にしないと、その子から拒否されてしまう。むしろ、子どもがプライドをもって自分からすること多くしていくうちに、自分が恐れていたことに対しても積極的に関心を向けていく力をつけていくのではないか。そして、つかまえられ、見られることをも遊びとして楽しむようになる。そのときには、自分が他人からつかまえられることが、同時に他人をつかまえることになり、見られることが見ることになるといふ、受動と能動が相互に交換される行為が保育者との間につくられている。

来るものを受けることによって大人の世界はひろがる

大人にとっても、自分が思っていなかったできごとに出会う。つまり、何かをされるという受身の立場におかれるとき、その他者を拒否し、防衛的になることがある。そのようなときは狭い自分の枠を守り、人間的成長を阻まれる。受身の立場におかれたときは、自分とは異なる他者にふれる可能性の中にいる。その他者があるがままに受けとめることによって、自分がひろげられ、変化し、成長する。自己実現とは、自分が能動的に何事かを実現するだけでなく、「られる」受動的立場におかれて、それに能動的に立ち向かい、それによって、より一層真の自己を発見することも含んでいる。向こうから来るもの

をどう受けるかは、大人にとって常に課題でありつづける。

三歳の子どもが衣服をぬがされるのをいやがったとき、子どもが受身の立場にあるのだが、その状況を受けて立つのは保育者である。そこで大人の考えを押し通したら、保育者は他者の世界にふれることはできない。子どもの抵抗に出会い、子どもの側の感じ方や考え方があることに目を向けるとき、保育者の視野は異質な子どもの世界にまでひろげられる。

K男と同様に、「される」ことにとくに敏感な大人もいるだろう。そういう人は、子どもと一緒にいるとき、思いがけないことに出会うと、まずそれを拒否しがちである。けれども、子どもから、受動を能動にかえることをくり返し経験し、次第に相手があるがままに受けとめる大人へと、人は成長し得る。更に大人は、子どもを育てる保育者となるとき、受ける仕方を修練する場が与えられる。壮年期の自我の成長の時である。

この原稿を書いているときの一日、レールをつなげて汽車を走らせていたK男が、急に保育室にかけこんで戸を閉めたことに私は気が付いた。そっと戸をあけてみるとK男は泣きそうになっていて、私に気が付くとすぐに戸をしめてしまった。そこにいた人にたずねると、K男は三人の男の子と面白くレールで遊んでいたが、K男の汽車を一人の子が取ったらその子の頭をぶって、保育室に走っていったということだった。K男は手の中の汽車を取られることに敏感に反応し、そして自分の感情が動揺したのを人に見られるのがいや

だったのだろう。けれどもじきに保育室から出てきて遊びはじめた。他人に自分のものを取られても、そこに生じた感情を自分自身で処理し、すぐに他の子どもと、一緒にの生活にもどった。子どもなりにその場を受けとめたのである。

K男は、相手のことがわかるチェントルマンだと、日頃から皆に言われている。

(愛育養護学校)

